

【新刊紹介】

伊藤 博著 飛行と天気

東京堂出版 1972年 A5版 272頁 1,800円

1970年の統計によると、日本の空には毎日 1,000機以上の飛行機が飛んでおり、国内線だけでも年間 1,500万人の人が飛行機を利用している。いまや旅客機は陸上のバスのように大衆の足になりつつある。年々、過密化して行く航空交通には、安全性、定時性、経済性が強く要求されるが、そのどれもが気象に深い関係をもっている。そして航空機の大型化、高速化、長距離化、高々度化などが、常に新たな問題を航空気象サービスに投げかけている。その航空気象サービスの理論と実際をわかりやすく簡潔にまとめたのが「飛行と天気」である。章のタイトルをあげると、第一章、「航空機の運航に必要な気象情報」にはじまり、空の交通整理と援助施設、航空機の性能や運航に重要な気象要素、大気安定と不安定、雲と降水、航空とレーダー、着氷、視程と視距離、視程障害現象、大気の運動、大気の大循環とジェット気流、気団と前線、低気圧と高気圧、雷雨、台風、乱気流、航

空気象業務の概要、航空気象の観測と通報、機上観測、天気図と予想天気図、航空気象予報、航空気象統計、離着陸に関する諸問題、超音速飛行と気象の各章が立てられている。

本の表紙はやわらかい合成紙でできており二つ折りになってポケットにはいるようになっている。パイロットにとって座右の書といえる。

気象学者や気象技術者にとっては、この本は二つの利点をもっている。ひとつは最近の専門化された航空気象サービスの概要を知ることができること、他のひとつは降水、雲、大気乱流、大循環、高・低気圧論、前線論などの新しい見方、考え方が簡明に述べられているため「気象の事典」的に使えることである。学問が極端に専門化した今日、このような総合的な本は気象技術者にとって貴重な教科書といえる。(倉嶋 厚)